秀峰富士山をめぐる

飯田 敬一

初めて富士山を撮りに降り立ったのが、JR富士川でした。初対面の富士山は人見知りしたのか、厚い雲の中に頭をすっぽりと隠してしまっていました。(92．1．18)

二度目は、幸運にも、すっきり晴れた青空に、「日本一の富士の山」が聳(そび)え立つ姿を存分に目の当たりにでき、感動に浸ったラッキーな一日になりました。(93．2．13)

以来、美しい富士山を撮りに、ポイント探しの旅をしてきました。

1　東海道沿線のポイント

車での足の無い私にとっては、行動範囲が限られ、写真集に見られる素晴らしい写真を撮るような欲深いことは望まないで、鉄道やバスの公共交通機関を利用して、駅やバス停を拠点に、歩ける範囲で撮影エリアを求めて廻りました。

まずは、東海道線東静岡、清水まで進んで降り立つと、駅のプラットホームや駅舎のコンコースの高い位置から、山容を眺められるようになります。しかし、この地点では、市街地のビルや鉄道沿線の電線が視野に入ってしまい、自然の中に聳える雄姿は望めません。

さらに東へ移動して興津で下車。駅からは近くの山の上にわずかに頭を出す富士山に、決意も新たに期待を込めて、足を頼りに、旧東海道の中道を求めて薩埵(さった)峠を目指して登ります。急な登り道に喘ぎながら、木立に囲まれて暗くなった狭い急坂を登り切ると、急に道の前方が開け、まぶしいほどに銀色に輝く駿河湾が迎えてくれます。ここからもしばらく登り坂の連続ですが、石段に入ると目的地の薩埵峠に到着します。ここまで興津駅から50分程度要しました。ここには薩埵峠の道標が建っております。右の険しい崖下に目をやれば、今は東海道線の電車や東名高速道路の自動車が行き交っているところが、昔は、旅人にとっては「親知らず子知らずの難所」であったのです。

峠から駿河湾越しに、雄大な富士山が聳え立ち、広重の五十三次の絵に描かれた構図に合わせて、シャッターを切りました。その写真を「クリエイト」(1995．1．No．40) に、迎春にふさわしいひとこまとして載せていただきました。

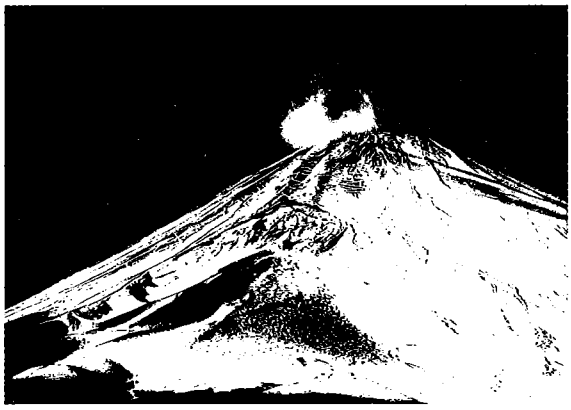
次のポイントは、旧東海道を北東に峠から下りて、由比で東海道線に乗ります。間もなく富士川の鉄橋を渡るおり、今までにないほど間近に迫る富士山が、旅人を包むように迎えてくれます。車内ではしきりにカメラで撮る光景が展開されます。富士川駅で下車して、20分ほど歩いて富士川の堤防へ出ると、国道1号線が渡る富士川橋を入れて富士山を撮る絶好のポイントに着きます。

これから先はカメラポイントが続きます。東田子浦下車、駿河湾の海岸に向かって10分ほど歩くと、高い護岸堤防に出ます。堤防に上がって、海を背にして松並木越しに富士山(1998．7．No．82) を撮れるポイントです。

松並木は、沼津から西へ延びる千本松原で、沼津の乗運寺の増誉上人が住民を汐の害から救うため、一本一本の松の苗に経文を唱えながら植え続けたと伝えられています。

2　御殿場沿線

沼津から御殿場線に入り、車窓に富士山が間近に見えるところが、富士岡です。プラットホームでも十分楽しめます。駅から歩いて数分のごく近いところに、かつてSLが走っていた頃、急勾配のため設けられたスイッチバック用の跡地があり、そこが今は観光スポットとなっていて、富士見台があります。ここでは、富士山の裾野まで視界を妨げるものがなく、山全体（2011．1．No．191）を写真に撮ることができます。ただ難を申せば、第2東名が付設されて、画面の下部に写り、いささか目障りになるのが惜しいです。望遠（200mm）で撮れば問題は解消します。



3　富士五湖周辺

より富士山に近づき、その雄姿を求めて御殿場からバスで河口湖へ入ります。富士急鉄道の終点まで、バスが通っています。ここから甲府へ向かうバスに乗り換えて、河口湖畔をしばらく走り、産ヶ屋岬で降りると、河口湖を入れて富士山（裏富士）を撮れる格好のポイントになります。（1991．1．No．88）。早朝、凪の好条件に恵まれれば、逆さ富士に出会うことができます。

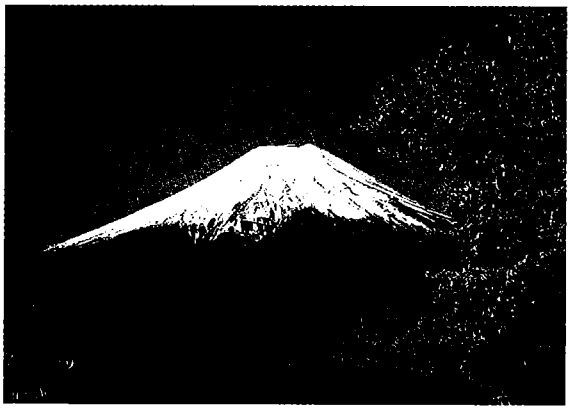
山中湖は、先ほどの河口湖バス路線の反対の北湖畔がよく、旭日丘バスターミナルで、山中湖周遊「ぐるりん山中湖」に乗り換え、対岸の長池口バス停で降りると、山中湖の湖面を入れて富士山を撮ることができます。

この長池では、2004年1月20日に「ムーンライトながら」の夜行を使い、沼津から御殿場へ、さらに河口湖行きバスで山中湖へ登って、朝の凪（な）いだ静かな湖面に、鏡で写したような逆さ富士（2005．1．No．119）を撮ることができました。なお、山中湖には富士山を眺めながら、温泉に浸かる別天地「紅富士の湯」があります。

このほか、西湖、精進湖、本栖湖へも河口湖駅から路線バスを利用できます。本栖湖は、バス停から5km奥（北岸浩庵荘）に入るカメラポイントがあります。

4　忍野村

足の許す範囲での富士山周辺のカメラポイントの中で、私の最も気に入っている場所は、忍野八海で知られる忍野村です。富士吉田か



ら忍野経由の御殿場行きバス路線で、大橋下車。流れる新名床川沿いの富士山が、最も好きな構図です。川岸に稲叢が数個置かれ、藁葺きの古民家が静かな佇(たたず)まいを漂わせ、春には桜（2006．1．No．131)、冬には霧氷の森(2001．1．No．100)、朝早くには川霧が幻想の世界（2008．1．No．155）を演出してくれ

ます。ここは多くのカメラマンが訪れるところです。望遠レンズ（200mm）を使い、山頂付近を画面一杯に拡大すれば、登山道までくっきりと写ります。

（No.197　平成23年７月）

佐久間記念交流会館（旧、記念館）訪問記

内田 富夫

15年ほど前、先輩の英語教師M氏が学校の「図書館報」に、「佐久間勉艇長」のことを書かれた。私がその稿を称賛したところ、M氏は「先生はその年齢で、佐久間艇長のことをご存知だったんですか?」と驚かれてしまいました。戦前は「修身」の教科書にも載っていた有名な人物だったのですが、戦後は軍人の名前はほとんど教科書から消えてしまいましたから、教員でも誰も知らないだろうと思っておられたようです。

ご存知の方も当然あろうかと思いますが、以下に事の概要を記します。

明治43年４月15日、初の国産潜水艇、第６号潜水艇（通称、どん亀）に佐久間大尉（30歳）を艇長とする14名が乗り組み、その訓練中に全員が殉職する事故が起きた。場所は広島湾新湊沖。

当時、外国でも同様の事故があり、引き揚げられた艇内で、乗組員全員が昇降口付近に殺到し折り重なって死亡しているのが発見されていた。当時、潜水艇への乗り組みは決死の覚悟が必要であり、死を前にした人間にとって止むを得ないことであろう。

ところが、６号艇の中では、全乗員が配置場所についたまま死亡していた。死に臨んでも持ち場を離れなかった、その職務に殉ずる高貴な精神に世界が驚嘆した。更に、佐久間艇長の遺体の胸から、手帳に鉛筆で記された遺書が発見された。多量の海水が流入し、明りの殆ど無い艇内、しかも、空気がどんどん薄くなり呼吸が苦しくなっていく状況の中で書いているため、段々文字に乱れが出てくるが、事故発生の経過と対応、関係者への謝辞、部下の遺族への配慮を望むことなどが記され、死に直面して、いささかも冷静さを失っていなかった。佐久間艇長と乗員達の立派な最期は、国の内外に衝撃と感動を与え、特に佐久間艇長の精神・行動が世界中で称賛の的となった。夏目漱石が「文藝とヒロイック」という文章を書き、与謝野晶子が十余首の挽歌を詠んだ。アメリカでは、国会議事堂の大広間に、遺書の原文コピーと訳文が展示され、イギリス海軍では、現在でも教訓とされているとのことです。

暫く時を経て、昨年（平成24年）のこと、以前古書店で買っておいた戦前の人気雑誌『少年倶楽部』の復刻版三冊本の、昭和８年７月号を見ていたら、中正夫作「海底決死の修繕」というタイトルの文章があり、佐久間艇長の話であることに気付いた。臨場感溢れる素晴らしい文章で、当時の少年達がドキドキしながら読んでいる姿が目に浮かんだ。更に、内容に驚いてしまった。世界中に有名になった実際の潜水艇事故の１年前に、同じ潜水艇で同じ様な故障が起きており、死を覚悟しながらもキビキビと対処する艇長と艇員の姿、そして事故対処に成功する状況が描かれており、文章の最後に、その後の同様の事故

での全員殉職の記事（実際の潜水艇事故）が書いてあるのである。

M氏のことを思い出した私は、久し振りに彼に連絡を取り、その文章を見せた。躍動感ある文章に感心しながらも初耳の内容に首を傾げた彼は、「以前から知り合いになっている、福井県の佐久間艇長の遺族の方にこの事を知らせていいですか?」と私に尋ねた。当然、私の返答は諾。

暫くして、佐久間記念交流会館（福井県三方町）の井口隆夫館長から丁重な手紙が届いた。感謝の言葉と共に、初見の文章であること、いろいろ調べてみたが、文章に書いてある様な事実は無いこと、執筆者がもう亡くなっておられるだろうし確認の仕様がない、等々の内容で、是非一度来館して欲しい、とのことであった。

その一か月ほど後、大日本雄辯會講談社から戦前出版された『修養全集』（全12巻）の１巻『日本の誇』の中に、長田幹彦作「佐久間艇長」という文章を見つけた。この全集は昭和50年代に全10巻で復刻本が出版されたが、この『日本の誇』の巻は除かれている。再度、M氏が福井県の方まで連絡を取ったところ、矢張り初見の文章とのこと。井口館長から再度来館の勧めがあり、M氏からも強く誘われ、八月初めに記念館を訪問することになった。

当日、以前にも行ったことがあるというM氏の車に同乗させてもらい、晴天猛暑の中、お昼過ぎに会館に到着。会館前左方に、東郷平八郎元帥揮毫の「佐久間大尉生誕地」の石碑あり。井口館長の大歓迎を受けた。

井口さんは日焼けした健康そうな笑顔で我々を迎え入れて下さり、「72歳になります。地元の役所に勤めた後、東京へ出て定年まで東京都庁に勤務していました」とのこと。「童門冬二さんと同じ頃ですか?」という私の問いに少々驚かれながら、「そうです。童門さんとは一緒に働いていました。大らかで余り細かいことを言わない、面白い人でした。知事さんは、美濃部さん、鈴木さん、青島さん、そして、石原慎太郎さんの一年目の終わりで定年になりました。その後、地元に帰ってきて、子供の頃から大変尊敬している、佐久間艇長の記念館のお世話をさせていただいているのです。都庁の就職面接の時に、尊敬している人物を聞かれて、故郷の佐久間勉艇長の名前を挙げて面接官に驚かれました。当時でも、尊敬する人物に軍人の名前を挙げる人はほとんど居なかったようです」という話をされた。

展示物以外に、我々のために艇長の様々な資料を準備しておられ、余り痛んでいないのに書き込み等からよく読んであることが分かる愛読書も特別に見せていただいた。また、艇長の学生時代の、手書きで写し取った何冊もの教科書を示しながら、「教科書を無償で配給されている現代の小中学生のことを思うと、いろいろ考えさせられてしまう」また、「佐久間艇長は、若くして見事な殉職をされた神様の様な方ですが、事故死のため、靖国神社には祀られてないんです。東郷平八郎元帥も畳の上で亡くなっているから靖国には祀られてないんですよ」と言われた。

その後、会館の上方にある艇長の生家・お

墓（佐久間大尉夫妻の墓）、及び六号神社に案内され、ご神体（第六号潜水艇の板の一片）まで見せて頂いた。更に、その上方にある、艇長の父親が神官をしていた前川神社にも案内された。一時間半程度の訪問予定が、三時間超の滞在になってしまった。本当に親切にしていただいた。故郷三方町の生んだ偉人に対する溢れんばかりの愛情と尊崇の念を吐露されながら、同時に、地元教育委員会のホームページに佐久間記念交流会館のことが全く紹介されていないことに対する不満を漏らされたことが、最後の印象に残った。

最後に、時間の都合で訪れることができなかったが、小浜公園に在る佐久間艇長銅像の銘板の言葉を添えて、本稿を終えたい。

刻々に死の迫り来る
広島湾の海底に
従容として責務を果し
知と勇と人の情を
潮ひたす手帳にこめて
天の命を待つ
時に明治43年４月15日
あゝかくて
ますらおのまことの精神は
世を越えて永久に生くべし

改めて佐久間艇長のことを勉強し直して、頭に浮かんだのが、幕末の偉人吉田松陰のことであった。二人は、人の生き方に関わる、まるで神の如き大きな足跡を遺して、ほぼ同じ年齢でこの世を去った。現代の子供達に必ず教え伝えるべき人物である。忘れ去らせてはならない。

（№225　平成25年11月）

小田木文楽復活の胎動

梅村 善孝

豊田市文化財団が進める地域文化交流会の仕事で、市の文化協会の役員さんに同行して、稲武交流館へ出かけた。予定の会議が終り、廊下を歩きながら、稲武の文化部会長のNさんから遠慮がちに声をかけられた。

「小田木（おだぎ）の人形浄瑠璃復活の話が出ておりましてね…」

「いい話ですね、頑張ってください。今のままでは勿体ないですよ。問題は人とお金でしょうか…?」

「そうです。稲武はそれが無くって…」

「豊田市も、現状は金欠病で、かつて市民野外劇をやった頃のような元気はありません」

申し訳なかったが、この種の話に、無責任な深入りはできない。お気持ちは痛いほど分かる。Nさんも深追いされなかった。

飯田街道を足助から伊勢神のトンネルを抜け、段戸高原県立自然公園の山裾を大きく迂回して、暫く車を走らせると、左側の谷底に人家が点在するのが目に入る。ここが話題の小田木集落である。

現在の飯田街道（国道153号）が出来る以前の旧飯田街道は、この谷底の集落の中を抜けていた。伊勢神峠との高低差を思うと気が重くなる。昔の旅人や信州中馬は、ここから峠まで続く、葛折れの険しい山道に難渋した。飯田街道随一の難所と恐れられたのである。

小田木と稲武境の峠に中電の発電所があり、隣接して稲武の「ちゅうま資料館」がある。観光客のほとんどは、同じ敷地内にある銘酒「空」で有名な田口の関谷酒造の「吟醸蔵」試飲場の方へ流れて行くが、その流れに敢えて抵抗して「資料館」へ入ると、最初に目に飛び込んでくるのが、大きなガラスの陳列棚に飾られた人形浄瑠璃の頭（かしら）と衣装の数々、山と積まれた台本である。

説明書きを概略すると「江戸時代中ごろから、八幡神社の境内の舞台で奉納上演されていたが、天保の飢饉以降の倹約令で禁止され、明治８年以降は途絶えた」ようだ。

事務所の方に尋ねると「今は伝承する人もないので、ここでお預かりしています」とのこと。

農村の伝統文化の後継者難はどこも深刻である。その担い手である若衆不在と、氏神様やお寺様の年中行事の衰退がそれに追い打ちをかけている。豊田市のように「地域わくわく事業」の財政支援や、文化財団の行事支援など、援助の手を差し伸べようと試行する自治体は、まだ恵まれているが、それでも担い手は、ご婦人と子供が頼りである。

同じような人形浄瑠璃は矢作湖の対岸（岐阜県側）の串原にも伝承されおり、地理的関係から、ルーツは同じと推測でき、飯田か多治見方面の室町期の豪族に保護されたものが、伝播継承されたものと思われる。

稲武へ行った数日後、中日新聞の豊田版に

「人形浄瑠璃復活へ準備会」なる記事が載った。こんなに早く仕掛けて大丈夫か?と案じながら、記事に目を通した。「復活への取り組みは、昨年９月、農村舞台アートプロジェクトがきっかけだった」とある。

さてはＫ氏の仕掛けだったかと合点した。Ｋ氏は豊田市文化財団の文化部長であった当時、今では伝説に近くなった「とよた市民野外劇」の実質的仕掛け人と目される人で、独特の文化論・芸術論を持ち、自らも現代生け花の旗手を自認しておられ、優れた企画力と発信力には定評のある稀有な人物である。私も元気な頃は、赤提灯の店で、盃を交わしながら、議論をたたかわせあった仲間でもある。

早速電話すべきか?と考えたが、今更、病人の出る幕ではないと思い直して、敢えて止めることにした。

新聞記事によれば、現在保存されている人形45点、衣装30点があり、昭和42年に県有形民俗文化財に指定されており、前述のＫ氏らに背を押されて、昨年12月に準備会か発足したとある。準備会会長の話として「一度途絶えた伝統を復活させるのは、たやすいことではない。文献もほとんど残っていないが、素人なりに一生懸命、勉強したい」とあった。

旗揚げ公演まで５年計画、資金と支援者を募り、演じ手を募集し、人形の頭や衣装も伝統を踏まえて新たに制作し、稲武の「まちおこしにもつなげたい」と、意気軒昂である。

前途多難であることは想像に難くないが、蔭ながら成功を祈って止まない。

（№221　平成25年７月）